

旦那様は専属ボディーガード  
～溺れるほどの過保護な愛を  
注がれています～

---

水城のあ

*Noa Mizuki*

## 目次

旦那様は専属ボディーガード  
～溺れるほどの過保護な愛を注がれています～ 5

Eternal Love 267

書き下ろし番外編  
Another Episode 303

旦那様は専属ボディガード  
～溺れるほどの過保護な愛を  
注がれています～

## プロローグ

日本で屈指の製薬会社、ミスミ製薬の秘書室は、昼休みということもありしんと静まり返っていた。

重役の会食のお供に出掛けた者以外は社員食堂や社外へ食事に出ており、現在秘書室に残っているのは入社半年の三隅杏樹だけだった。

名前の通りミスミ製薬の関係者……というか社長である三隅孝太郎の娘で、今年の春入社したばかりだ。

杏樹としては親とは関係のない一般企業への就職を考えていたのだが、父や兄が就職活動にあれこれ口を出し、最終的には丸め込まれてミスミ製薬に入社することになってしまった。

それでも最初は社会人として会社で働くことに夢も希望も抱いていて、一社員として精一杯頑張るつもりで入社したのだ。

「ん……」

杏樹は片手にサンドイッチ、もう一方の手でパソコンのマウスを操りながらディスプレイを見つめていた。

映し出されているのは求人情報で、杏樹は気になる求人をつづ端からお気に入りに入れていく。

「……美味しい」

求人情報をチェックする片手間に、三隅家のお手伝い・里枝さとえが作ってくれたBLTサンドを頬張る。別の容器には形よく剥かれたデザートデザートのリングも添えられていた。

入社当初は先輩たちに誘われてランチに出掛けていたのだが、社長の娘である杏樹に対して誰もが腫れ物に触るようになり、気が遣っているのが伝わってきて、その雰囲気になれなくなり、弁当を持参するようになった。ついでに昼時の電話番を引き受けたところ、先輩たちはホッとした顔をして昼食に出掛けていくようになった。

それ以上無理に誘われることもなくなり、一人でのんびりランチタイムを過ごすことができるようになって内心ホッとしてしまった。いくら一般社員と同じように扱ってくれといっても、直属の上司である秘書室長や先輩秘書たちが自分に気を遣ってくれているのはひしひしと伝わってくるし、なんなら早く辞めてくれという空気すら感じる。

しかも実際に給湯室で先輩たちが、話しているのを聞いてしまったのだ。

「気を遣うなって言われても……社長の娘なんて気を遣うに決まってるじゃない」

「そうよね。ちょっと注意して、いじめられた！　なんて報告されたら困るから怒れないしさ」

「わかるー室長も早く寿退社しなくなつて言つてたよ。どうせ結婚までふらふらさせておくよりはマシって感じで入社させたんでしょ」

日々そんな空気を感じていたので、やっぱりそうかと納得してしまった。

大学時代の友人からは就職後の愚痴として、先輩が厳しいとか上司に怒られたなんて話を聞かされていたが、杏樹の職場ではそんなことは一度もない。仕事を覚えるのが大変だという声もあったが、そもそも覚えるのが大変な仕事など任されたことがなかった。杏樹が電話番の他に任されることといったら郵便物の仕分けやお中元の送り先リストの整理、新規の名刺をデータベースに入力するとか、言い方は悪いが単調で誰にでもできる仕事だ。

他に大きな仕事と言えば重役会議でのお茶出しだ。子どもの頃から見知った重役も多く、杏樹がお茶を出すときみんな相好を崩して「あの小さかった杏樹ちゃんが」と喜ぶかららしい。

父や兄が秘書室長になにを言い付けているかまではわからないが、在籍させて当たり障りない仕事をさせておけばいいと思われているのは一目瞭然だった。親の目の届くところで社会経験をさせて、適当なところで結婚させればいいと、今どき時代錯誤なことを

を考えているらしい。

親の要望を聞き入れる形でミスミ製薬に入社したのに、これでは飼い殺しのようなもので、頑張ろうという気持ちも失せてしまう。

外で働くことに夢を抱いているわけではないが、どんなに大変でもお給料に見合った仕事をしたいと思うのは我儘ではないだろう。

今のままでは親の影響下でそれも叶いそうにない。そこで最近自力で転職先を見つけようと奮闘しているところだ。

問題は入社半年で転職となるとなかなか条件が合わないことだった。転職といえは自身のスキルを活かせる職場を探すのがベストだが、秘書課といっても本来秘書がすべき仕事など任されたことはない。できることといえばちょっとパソコンに触るとか電話の受け答えができる程度で特筆すべきことがなにもなかった。

とりあえず先日初めて転職エージェントの会社に登録をしたばかりで、今日の夜担当者とは面談することになっている。これで少しはいい方向に動くかもしれないと期待していた。

今の杏樹の目標は、転職をして憧れの一人暮らしをすることだ。

家族には家事もほとんどしたことがないのに一人暮らしなど無理だと言われているが、自分でちゃんと稼げるようになればあれこれ言われなくなるだろう。

杏樹は大きな口を開けてサンドイッチを頬張りながら、転職後の自分の姿をあれこれ想像してみる。よくわからないけれどカッコよく仕事をして、一人暮らしをして親に門限などうるさく言われずに友達と夜遊びをするのもいい。

実際にはお手伝いさんが用意した弁当を持参し、家に帰れば温かい食事が用意されている。本当は自立など全くできておらず、言っていることと行動が伴っていないことに、杏樹は全く気付いていなかった。

転職エージェントとの約束がある杏樹は、定時になると汐留にあるオフィスを出た。

といつても残業の必要がある仕事を抱えたことなどないので、一番下っ端だというのは毎日定時に会社を出るのが日課になっている。

まっすぐ家に帰るときもあるが、徒歩圏内に銀座や日比谷といった街があるので、大抵はファッションビルやデパートを覗くとか、文庫本片手にカフェに入るとか寄り道することが多い。

今日は待ち合わせに銀座のカフェを指定されていて、杏樹は大通りの交差点に立ち腕時計を見た。

約束の時刻まではあと一時間弱といったところで、電車やタクシーは使わずブラブラ歩いて行くことにする。ついでにデパートのパウダールームで化粧直しをしていけば

ちようどいいだろう。

エージェントや友人から連絡が入っていないか確認するためにバッグの中からスマホを取り出す。信号がそろそろ青に変わりそうだと思いながらディスプレイに視線を落とした。

メッセージアプリには友人からのメッセージのみで、あとで返信しようと顔を上げたところで信号がちょうど青に変わる。杏樹が反射的に横断歩道に足を踏み出したときだった。

突然アクセルを強く踏んだときに聞こえる、ふかすようなエンジン音がした。ドキリとした次の瞬間、杏樹は誰かに腕を引っ張られてその場に尻餅をついていた。

「きゃっ！」

そう叫び声を上げたたん、目の前を白い車が走り抜け、周りからも次々に悲鳴が上がった。

なにが起きたのかわからず座り込んだまま辺りを見回すと、杏樹のように座り込んでいる女性が数人いる。中年女性の一人はどこかを痛めたのか道路にうずくまっていた。

状況から見てどうやら信号無視の暴走車が走り抜けたらしいというのは理解できたが、突然の出来事にまだ頭がつかない感じがした。

他にも鞆を抱えて尻餅をついているサラリーマン、手を取り合っている若い女性のグ

ループ、あちこちで間一髪で車を避けることができた人たちが驚いたり、暴走車に対しての怒りの言葉を口にしていた。

「怪我は？」

力強い声に顔を上げると、スーツ姿の男性が眉間に皺を寄せながら杏樹を見下ろしている。三十代前半ぐらいでなかなかのイケメンだ。

杏樹はフレアスカートの裾が太股までめくれていることに気付き、赤くなつてスカートを手で引き下ろす。

「だ、大丈夫です」

真っ赤になつた杏樹を見て男性がクスリと笑いを漏らし、眉間の皺が緩む。優しく緩んだ唇を見た瞬間、杏樹の心臓が大きく跳ねた。

「……っ!!」

これ以上男性の顔を見ていられなくて目を伏せると、手が差し伸べられる。

「立てる？」

男性は杏樹の返事待たずに手首を掴むと、引つ張りあげるようにして立ち上がらせてくれた。

「あ、ありがとうございます……」

「痛いところはない？」

顔を覗き込まれて、小さく首を横に振った。

「そう。今は突然のことにアドレナリンが出て気付かなくて、あとから痛んでくることもあるから気を付けて」

「はい」

杏樹が頷くと、遠くから救急車やパトカーのサイレンが聞こえてくる。すでに近くの交番から駆けつけたと思われる警察官もいて、座り込んでいた人たちに声を掛けていた。

「そうだ。これ君の？」

男性が手渡してくれたのは、ピンク色のシリコンカバーがついた杏樹のスマホだった。そういえば横断歩道を渡るとき手に持っていたけれど、転倒のタイミングで落としてしまったのだろう。

「私のです！ ありがとうございます」

「どういたしまして」

男性の笑顔に再びドキリとしてしまい、これはもしかして運命の出会いではないかという思いが杏樹の中に生まれる。

とりあえずお礼を言つて、連絡先ぐらい尋ねてもいいんじゃないだろうか。杏樹がそう考えたときだった。

「大丈夫ですか？ 怪我はされてませんか？」

一人の警官が駆け寄ってきて、杏樹の思考が遮られる。

「あ、はい」

「もし大丈夫であれば、少しお話を聞かせていただきたいのですが」

杏樹は警官の言葉に頷いた。事情聴取というやつだろう。

自分に怪我はないが、暴走車の犯人はきちんと取り締まってほしい。助けてくれた男性の方が色々見ていたかもしれない。ついでに名前や連絡先をさり気なく交換できないだろうか。杏樹はそう思いながら男性を振り返った。

「……あ、れ？」

ついさっきまで会話していたはずの男性の姿はそこにはなかった。

「どうされました？」

「今、ここにいた人……」

「え？ お知り合いだったんですか？ 私が来るときに立ち去られたので、てっきりお知り合いじゃないと」

警官の言葉に杏樹は辺りを見回したが、やはり男性の姿はない。

「いえ、知り合いじゃなくて、たまたま助けてくださって……」

「あーなるほど。こういうとき、名前を明かしたり事情聴取にまでは関わりたくないって立ち去ってしまう方も多いんですよ。こちらとしては正確な状況を知りたいのでは非

ご協力いただきたいんですがね」

警官の口調からすると、目撃者や救助者が立ち去ってしまうのはよくあることらしい。確かにあれこれ聞かれて時間を取られるのは煩わしいかもしれない。

でもせめて一声かけてから立ち去ってくれたら、名刺の一枚でも渡してちゃんとお礼を言うことができたのに。運命の出会いだと盛り上がってしまった分、落胆も大きかった。

「じゃ、すみませんが、あちらで詳しいお話を聞かせてください」

「はい」

杏樹は警官の言葉に頷くと、もう一度先ほどの男性が立っていたはずの場所を振り返った。

# 1

「はあ……」

まだ出勤したばかりだというのに、杏樹はパソコンの画面を見つめながら盛大な溜息をついた。

辛い昨夜の暴走事故での怪我人はほとんどいなくて、杏樹もかすり傷一つせずに済んだ。しかし話を聞きたいと警察に足止めをされ、事情聴取を受けているうちに転職エージェントとの約束の時刻になり、泣く泣く面談をキャンセルすることになってしまった。事情を聞いた担当者が早く日程変更を提示してくれたのは幸いだったが、せっかくやる気になっていた出鼻をくじかれた感じだ。

それにせっかく出会えたイケメンとそれっきりになってしまったのも残念でならなかった。

これがマンガやドラマなら運命の出会いで恋が始まったりするものなのだが、現実にはそんなことはないらしい。

そんなことをグズグズと考えていると朝礼が始まり、その最後に珍しく秘書室長に声を掛けられた。

「三隅さんはこの後社長室をお願いします」

「え？ あ、はい」

わざわざ社内でも父に呼び出されることなどなかったのも、杏樹は困惑しながら返事をした。今朝、家で会ったばかりなのに何事だろう。

まさか転職活動をしていることがもうバレたとか、それとも早くも見合い話でも持ちかけられるのだろうか。でもそれならわざわざ会社で話さなくてもいいはずで、杏樹は

首を傾げながら社長室に向かった。

「失礼します」

一応誰か他の人がいるとまずいと思い声を掛けると、案の定先客がいた。

父と応接セットに向かい合って座っている男性二人の後ろ姿に、杏樹は父のスケジュール表を見てこなかったことを後悔した。

「杏樹、来たか。こっちに来なさい」

手招きされて父に向かって歩き出したとたん、手前のソファに座っていた男性二人が立ち上がる。そしてこちらを振り返った片割れの男性を見て杏樹はその場で棒立ちになっってしまった。

「……あっ!!」

それは昨日杏樹を助けてくれた男性で、黒っぽいスーツにグレーのネクタイは一見地味だが、すっきりとしたスタイルの彼によく似合っている。向こうも杏樹に気付いているはずなのに、にこりともしないのが憎らしい。

よく見ると隣の男性も同じ色味のスーツを身に着けていて、こちらは杏樹を目視すると唇に人好きのする笑顔を浮かべた。

「杏樹。どうした？」

「あ、うん」

父の言葉に我に返った杏樹は、慌てて父のそばに歩み寄った。

「こちらS I Nセキュリティーの椎名くんと横井くんだ」  
エスアイエヌ しいな よこい

「はじめまして。S I Nセキュリティー代表の椎名です」

「あ……お、恐れ入ります」

差し出された名刺を両手で受け取る。自分も名刺を渡した方がいいかと思ったが、出番のない名刺入れはデスクの引き出しの中だ。

名刺はS I Nセキュリティー代表取締役という肩書きで、昨日聞きそびれてしまった椎名創はじめという彼の名前を知ることができた。

「横井です」

先ほどから柔和な笑みを浮かべていた男性の名刺は警備部長という肩書きがついている。つまりS I Nセキュリティーというのは警備会社らしい。代表取締役の椎名からして若いものだから、まだ新しい会社なのだろう。

だとするとミスミ製薬の取引相手としては想像できない。誰かの紹介で挨拶にでも来ていて、たまたま杏樹が遭遇してしまったというところだろうか。

まさかこんなところで会えるとは思っていなかった人に再会できて、杏樹の中で消えかかっていた運命の出会い説が再び色濃く浮かび上がってきた。

するところくに挨拶もせずに黙り込んでいる杏樹に、父が訝いぶかするような眼差しを向けた。

「どうした、さつきからおかしいぞ」

「えっ……と」

すると狼狽うろたえた杏樹の代わりに椎名が口を開く。

「実は、昨日偶然お嬢様をお助けする機会がありました。そのことを思い出していらっしやるんでしょう」

「どういことだ？」

父は椎名と杏樹の顔を交互に見比べたが、昨日のことを家族の誰にも話していなかったので困ってしまう。

三隅家の人たちは杏樹に対してかなり心配性なところがあり、高校を卒業するまでは通学は車で送迎されていたし、友達と夜遊びをするなんてことは皆無だった。

さすがに大学生になり少しずつ手綱が緩んで電車やバスに乗ることや一人でカフェに入る楽しみも覚えたが、未だに友達と食事に出掛けて遅くなるだけで大騒ぎをされてしまう。

昨夜の事故は杏樹に非はないが、父が心配して送迎車を出すと言いつい出しかねない。いくら社長の娘とはいえ、新入社員が車で送迎されるなんてありえないだろう。

「杏樹、なにがあつたんだ」

痺れを切らしたような父の声に、どう説明すれば騒ぎ立てられないかと困り果てたと

きだった。

「私からご説明します。社長、まずはお座りになってください」

一瞬救世主のように感じたが、よく考えれば椎名が昨日のことを黙っていてくれればよかったのだ。

もちろん椎名に杏樹のそんな心の声が届くはずもなく、彼は昨日の経緯を説明し始めた。

「……つまり、杏樹はその車の暴走に巻き込まれそうになったということか？」

「うん。でも椎名さんが助けてくれたからなんともなかったの」

「本当に？ どこか怪我をしたんじゃないのか？」

案の定父が過剰に心配し始め、杏樹は椎名に恨めしげな眼差しを向けた。

こうなるのが嫌だから昨日の事故のことは家族に伝えなかったのに。そもそも怪我もしていないし、偶然その場に居合わせた程度で被害者と呼んでもいいのか怪しいところだ。

きつとこの後に、会社帰りに寄り道せず家にまっすぐ帰れとか、まるで小学生の子どもに注意するようなことを言われるのだろうとうんざりする。

「でも、そういうことがあったのなら、椎名くんたちに来てもらったのはちょうどよかったな」

父はなぜかホッとしたように椎名たちに視線を向けた。

「実はしばらく彼らに杏樹のボディーガードを頼もうと思って、紹介をするために呼んだんだ」

「……ボディーガード？」

「まあそんな大袈裟なものでもないが、杏樹の送迎や外出のときの運転手のようなものだ」

父はそう言ったが、いくら運転手だとしても一度でもボディーガードという言い方をしたことが問題だ。それに社長の父に運転手がつくのは理解できるが、車で送り迎えされる新入社員など聞いたことがない。

そもそもどうして突然ボディーガードなどと言い出したのだろう。

「別に電車通勤で不便はないし、どうしても運転手が必要なら原さんはらがいるじゃない」

高校までは、毎朝父の運転手である原が杏樹を学校まで送ってくれていた。必要なら今まで通り原に頼めばいい。

「原くんは私の運転手だから毎日杏樹の送迎を頼むわけにいかないだろう。とにかくしばらくの間は彼らに送迎してもらいなさい」

「でもどうして突然ボディーガードなの？」

「それは……」

門限こそあるものの今まで電車通勤に口を出してきたことなどなかったのに、はいそうですね。それに父の言葉にはなにか含みがあるように思えてならなかった。

「ほら、昨日助けてもらって椎名くんに実力があることはわかってるんだから、杏樹だって安心だろう？ いいじゃないか」

「だから！ そういうことじゃなくて、ちゃんと理由を説明してって言ってるの！」

杏樹がさらに詰め寄ると、父が負けじと怒鳴り返してきた。

「我儘を言うんじゃない！ とにかくもう決めたことなんだから、おまえは私の言うことを聞いていればいいんだ！」

ガツンと怒鳴りつけられて一瞬<sup>ひん</sup>怯んだが、父が思い通りにならないときに怒鳴るのは昔からだ。この手のやりとりを何度もしている杏樹が言い返そうと口を開いたときだった。

「まあまあ！ 社長、落ち着いてください」

杏樹よりも一瞬早く、椎名の言葉が割って入る。

「私が責任を持つてお嬢様を説得して、きちんとお守りいたしますので。さっそくこの後打ち合わせをさせていただきますので失礼します」

椎名は早口でそう言うと、杏樹の手首を掴んでさっさと社長室を出てしまった。

二人に続いて横井も出てきて、背後で扉が閉まる。次の瞬間、杏樹の中で途中で遮られてしまった父への怒りが膨れ上がった。

「もう！ さっきからあなたなんなの!? どうしてあんな余計なこと言うのよ!!」

思わず椎名を怒鳴りつけてしまふ。あんな言い方で部屋を出てしまったら、杏樹がボディーガードを受け入れたことになってしまふのに。

「昨日助けてもらったことにはお礼を言うけど、どう考えても私にボディーガードなんて必要ないってわかるでしょ。父には私からあとで話しておくから帰って!!」

「こっちだってガキのお守りなんてしたくねーよ」

「なっ！」

父に対するときとは違う口の悪さにムツとすると、椎名はさらに煽<sup>あお</sup>るようなことを口にした。

「おまえの親父さんがどうしても娘を頼みたいって頭を下げてきたからこっちだって引き受けたんだ。子どもはおとなしく大人の言うことを聞いておけばいいんだよ」

「し、失礼ね！ もう二十三なんだから、れっきとした大人です!!」

「そうやってギャンギャン騒いでいるうちはガキなんだよ。それに、俺が契約をしたのは親父さんであつておまえじゃない。だから、おまえの言うことは聞かない」

「なんでそんな偉そうに言われなくちゃならないのよ！」

「椎名さーん、クライアントのお嬢様ですから」

さして慌てた様子もなく、横井がおざなりに口を挟む。

「もうっ！ あんたたちなんなのよ！」

こんな失礼な人たちとは一秒だって一緒にいたくない。ましてや車で送迎なんてされたらキレてしまうだろう。

「とにかくこっちも仕事だから我儘言うな。とりあえず今日は横井に送らせるから勝手に帰るなよ。明日からのことはまた連絡するから。あ、おまえのスマホ出せ」

杏樹がスマホを出すのとサッと取り上げられ、椎名がなにかを打ち込む。

「ちよっと！ 返しなさいよ!!」

ピョンピョンと飛び跳ねて椎名の手からスマホを取り戻そうとしたが、見上げるほど背が高い椎名が自身の肩よりスマホを高く上げてしまっただけは無駄な努力だった。

「返してっば！」

そのときどこかで唸るようなバイブ音が聞こえる。杏樹の目の前で椎名が胸ポケットからスマホを取り出した。

「よし、登録完了。今発信履歴に残ってるのが俺の番号だから登録しとけよ」

当たり前のようにポンと手のひらにスマホを投げられたが、あまりの手際の良さに言い返す隙もなかった。

「じゃあな」

椎名はからかうように杏樹の頭をポンポンと叩くと、呆然とする杏樹と相変わらず柔和な笑みを浮かべたままの横井を残して立ち去ってしまった。

\*\*\*

その日の夕方、仕事を終え会社の外に出ると黒い車の前に横井が立っていた。

「お仕事お疲れさまでした」

杏樹を見つけると笑顔で手を上げ、そう言って後部座席のドアを開けてくれる。

「……ありがとうございます」

ボディガードについては納得していないけれど、こんな態度をされたらおとなしく車に乗るしかない。待っていたのが椎名だったらあかんべーをして、さっさと立ち去っていただろう。

とりあえず今日は仕方がないとしても、今夜父ともう一度話をして明日からの送迎は絶対に断ろうと考えているうちに車は夕方の街へと走り出していた。

「今日はあまり混んでいないようなので、ご自宅までは三十分くらいでしようか。眠くなったらお休みになってもいいですよ」

横井がミラー越しに微笑むのを見て、杏樹は思わず聞いてしまった。

「椎名さんっていつもあんな感じなんですか？」

「あんな感じって？」

「ワンマンで俺様でめっちゃくちゃ感じ悪いじゃないですか。横井さんよく付き合えますよね。ていうか、あんな失礼な人が代表の会社って、大丈夫なんですか？」

思わずそう口にする、横井が前を向いたまま笑う気配がした。

「今朝は失礼しました。悪い人じゃないんですけど、ちょーつと口が悪いんですよ」  
あれがちよつとだと言うのなら、世の中に口が悪い人などほとんどいなくなってしまうような気がする。

「普段のクライアントの対応は私がしているんですが、今回はうちの椎名のお父上と三隅社長がご友人だそうで、椎名自らご挨拶に伺ったんです」

「ふーん」

ということ、椎名は実はいいところのおぼっちゃまというやつかもしれない。我儘放題に育てられて、あんな態度の悪い男に育ってしまったのだろう。

もしかしたら、俺様で我儘だから普通の会社では務まらずそれで起業したのかもしれない。いいところのおぼっちゃんに手を焼いた親が会社を与えるなんてよく聞く話だ。

すると杏樹の考えていたことが聞こえていたかのように横井が言った。

「あの、ああ見えて警察出身なんですよ」

「け、警察？」

意外な職業にも思えたが、刑事ドラマの中ならあんなイケメンで偉そうな口調の人がいても違和感がない気がした。

「それもお父上がかなり偉い方で、まあいわゆる警察幹部のご子息、エリートだったんですけどね」

「横井さんとは警察で知り合ったの？」

「いえ、高校時代の同級生なんです。昔から正義感が強くて、きつと立派な警察官僚になると思っていたんですが、正義感が強過ぎてね」

ミラー越しに横井が苦笑いを浮かべたのが見えたが、ガラが悪過ぎての間違いではないだろうか。警察官僚なら確かにエリートだが、年功序列だの言葉遣いなどあの椎名が守れるとは思えない。

杏樹がそのままを口にする、横井がプツと噴き出した。

「ああ見えて猫かぶるのほうまいんですよ。三隅社長ともちゃんとお話しされていたでしょう？」

確かにだからこそ杏樹に対する言葉遣いや態度のギャップに驚いたのだ。つまり相手を選ぶということだろう。

そう考えるとまた朝の怒りが蘇ってくるが、こちらだって素直に言うことを聞くつもりはない。もう二度と椎名と顔を合わせる気はないし、父と彼の思い通りになるつもりもなかった。

「あ、言い忘れてましたけど、私は陸上自衛隊出身なんです」

「ええっ!？」

椎名が警察官僚だったという事実よりも衝撃的な内容に声が漏れてしまう。

確かに身体つきは大きいけれど、勝手に自衛隊の男性に対して厳ついイメージを持っていたので、横井のように一見普通のサラリーマン風の容姿からは想像できなかった。

「どうして椎名さんと一緒に働いてるんですか？」

踏み込みすぎた質問かと思ったけれど、正反対とも言える二人がどうして一緒にいるのが気になった。

「そうですね……国を守るより人を守りたかったというか。まあ、一番の理由はタイミングですね。まるで私が自衛隊を辞めるタイミングを見ていたかのように、連絡が来たんですよ。起業するから一緒にやらないかって」

なにかを思い出すような横井の口調は懐かしさを含んでいた。

「彼は学生の頃から瞬発力も行動力もあるんですが、おとなしく机の前に座っていられるタイプじゃないんです。規律の厳しい警察では窮屈だったんでしょうね。私はその逆

で、決められたことを淡々とこなすのは得意なので、組織に属している方が自分のすべきことがわかって楽なんです。でも椎名と一緒にいる方がお互いがそれを補い合えるんじゃないかと思って、彼と一緒に仕事をすることに決めました」

お互いが足りないものを補い合う関係なんて、恋人とか夫婦とか特別な関係に似ている気がした。椎名が夫で、横井がそれを支える妻役といったところだろうか。

「さ、着きましたよ」

おしゃべりをしているうちに車は三隅家の前に到着していて、横井は後部座席まで回って扉を開けてくれた。

「お待ちせしました」

「ありがとうございます」

「仕事ですからお気になさらず。明日の朝は私がお迎えに伺いますが、この先一週間分の大体の予定を教えていただけると助かります。椎名から電話番号は聞きましたが、よろしければメッセージアプリのIDを交換しませんか？」

「もちろんです」

横井とならこんなに素直に接することができる。ずっと横井が送迎してくれるのなら少しぐらい父親の横暴に付き合ってもいいかもしれない。それぐらい椎名の第一、いや第二印象は最悪だったのだ。

「では、後ほど今週のスケジュールを送ってくださいね。明日は八時にお迎えに伺いますから」

横井は杏樹が門を開けて、自宅のドアを開けるまでずっと見守ってくれて、こういうところが運転手とボディーガードの違いなのかもしれないと思いながら扉を閉めた。

## 2

翌朝、杏樹は約束通り横井の運転で会社に向かい、会社からワンブロックほど離れた交差点で車から降りてもらった。

朝の通勤時間に会社の前に車で乗りつけるなんて注目を浴びてしまう。社内で社長の娘であることは知られているが、だからこそ悪目立ちしたくなかったのだ。

「帰りもここでお願います」

「わかりました。帰りは椎名がお迎えに伺いますので」

「……」

杏樹がなんとも言えない表情で黙っていると横井が苦笑する。

「そんなに椎名を毛嫌いしないでください。仕事はできる人ですから」

「……はあ」

杏樹は曖昧に返事をする、お礼を言って別れた。

仕事ができたとしても、自分と椎名は究極に相性が悪い気がする。あんなふうに一方的に自分の考えを押しつけてくる男性は苦手、というか父に似ていて嫌いだ。

よく女の子は父親に似たタイプと結婚したがるというけれど、そんなの都市伝説か父親の夢として語られているとしか思えない。

唯一残念なのは顔はめちゃくちゃタイプなので、助けられたときに一瞬運命を感じてときめいてしまった自分だ。まあ、次に会うときは態度の方が気になって、そんな気持ちにはならないだろう。

今日はリスケした転職エージェントとの面談予約が入っていたが、実は横井に渡したスケジュールにはそのことは書いていなかった。

父に転職の話をしていないので、万が一、彼らの口から知られたら困ると思ったのだ。絶対に反対されることはわかっているから、ちゃんと転職先が決まってから既成事実をぶつけて押し切ろうと考えていた。

最初から今日は迎えの車に乗らないつもりだったが、椎名が迎えに来るといふのなら都合だ。横井相手なら抜け出すことに罪悪感を覚えてしまうが、椎名相手ならなんの躊躇いもなく無視することができる。

杏樹はいつも通り、誰にでもできる業務を淡々とこなして定時にオフィスを出たが、念のため正面玄関を使わず、裏口の警備室側から外に出た。

エージェントとは前回と同じ銀座のカフェで待ち合わせをしていて、まさか二度も暴走車に遭遇するとは思わなかったが、今日は念のために電車で移動した。

約束の店に着くと席はほぼ埋まっていて、ウェイトレスに待ち合わせだと告げて店内を見回す。女性の一人客は見当たらず、バッグの中からスマホを取り出した。

混んでいるから先に席を確保しておくことを伝えようとしたときだった。

「三隅さんですよね？」

店の奥で立ち上がり、手を挙げた男性の姿に杏樹はギョッとした。

担当者の名前は村瀬響むらせひびきという。てっきり女性だと思い込んでやりとりをしていたが、どうやら男性だったらしい。メールのみの連絡だったので、勝手に女性だとばかり思っていたのだ。

「三隅さん……じゃなかったですか？」

とっさに返事ができずにいると、すぐそばまで来てくれていた男性が申し訳なさそうにしゅんとする。杏樹は慌てて口を開いた。

「いえ！ 三隅です!! 間違ひありません!!」

力んで大きな声になってしまい、すぐそばの席に座っていた女性客がチラリとこちら

を見た。

「よかった。それじゃあこちらの席で」

村瀬はクスリと笑いを漏らすと、杏樹を窓際の席へと案内した。

銀座の大通りに面したカフェで、夕方の街には人が溢れている。メニューを渡され恐縮しながら飲み物を注文すると、杏樹は先ほどの態度を詫びた。

「さっきはすみませんでした。私、勝手に村瀬さんが女性だと思い込んでいて」

「ああ、なるほど。気にしないでください、よく間違われるんです。響って女性の名前にも多いですね」

村瀬は恐縮する杏樹に向かって笑顔を向けた。

そのなんとも言えないほんわかとした空気に、初めての面談に少し緊張していた杏樹はホッとしてしまった。

スーツに眼鏡、一般的なビジネスバッグにテーブルの上にはパソコンと、村瀬は至って普通の人だ。年は二十代後半か三十そこそこに見える。あまりキャラクターが強いから、逆に相手に安心感を与えるのかもしれない。

「どうしてすぐに私だってわかったんですか？」

「オンラインでいただいた履歴書の写真を拝見していましたから」

「ああー!」

なるほどと頷いたが、自分だったらあんな小さな写真では見逃してしまいそうだ。そう思いながら村瀬の顔を見つめる。

「それに、とても可愛らしい方だなんて思っていたので」

「……え」

そんなふうになんの含みもなくまっすぐに褒められるのは初めてで、杏樹は恥ずかしさに頬が熱くなるのを感じた。しかし、村瀬は特別なことを口にしたつもりはないのか、赤くなった杏樹には気付かず言葉を続ける。

「今日はわざわざご足労いただきましたましてありがとうございます。先日は事故に巻き込まれたとおっしゃっていましたが、大丈夫だったんですか？」

「はい。巻き込まれたというか……実際には目の前で事故を目撃したというか。それで事情を聞かれていて、お約束に間に合わなくなってしまったんです」

「それは災難でしたね。でもお怪我がなくてなによりです」

杏樹は、椎名に腕を引かれて横断歩道から引き離されたことを思い出した。

あのととき彼がとっさに助けてくれなかったら、暴走車に巻き込まれていたかもしれないと思うと、今更ながらゾツとしてしまう。

そう考えると、助けてくれた椎名に対して塩対応過ぎただろうかと急に罪悪感でモヤモヤしてしてくる。村瀬との面談の間中、椎名が今頃、待ち合わせに來ない杏樹のこと

を心配しているかもしれない気になって仕方がなくなってしまった。

「それにしてもメールのやりとりだけでは三隅さんのお人柄やお気持ちをなかなかくみ取ることができませんし、今日はこうしてお会いできてよかったです」

一通り話が終わり、パソコンをバッグの中にしまいながら村瀬が言った。ふんわりとした癒やし系の笑顔にホッとする。

「私もです」

こちらにもっこりすると、村瀬が杏樹の様子を窺うように言った。

「本当はこういうのは良くないんですが……もう少し三隅さんのお話も伺いたいのので、どこか場所を変えてお食事でもいいかがですか？ 最近の転職事情や需要についてもお話できますし」

「え？ いいんですか？」

ただでさえ、入社半年で転職を考えるのは条件としてあまり良くないのだ。それに、親身になってもらえるのはありがたかった。

「もちろんです。じゃあ移動しましょうか。ちょっと歩きますが、数寄屋橋にいいお店があるんですよ」

歩くといつてもこの店からなら十分かそこらだ。一人でも銀座から日比谷の辺りまでブラブラすることも多いから、それぐらいの距離なら気にならない。

「是非よろしくお願いします」

杏樹の言葉に村瀬がテーブルの伝票を取り上げたときだった。テーブルにスツと誰かが寄ってきたかと思うと杏樹の真横で立ち止まる。反射的に顔を上げると、そこにはあからさまに不機嫌な顔をした椎名が立っていた。

「……っ！」

まずい。そう思った瞬間、椎名がドン！と音を立ててテーブルに手を突いた。

「俺の婚約者になにか？」

「えっ？ こ、婚約者!?」

村瀬がビクリと肩を震わせて杏樹と椎名の顔を交互に見比べた。

「な、なに言ってる……」

どうしてここに椎名がいるのか、それから婚約者とはなんの事なのか頭の中が混乱してなにが起きているのかわからない。

「人の婚約者を食事に誘うなんていい度胸だな」

椎名はそう言うのと杏樹の手首を掴み乱暴に立ち上がらせる。

「俺との待ち合わせをすっぽかすなんてどういうつもりだ」

「……っ」

強い眼差しで睨みつけられて、あまりの迫力に言葉が出てこない。椎名はそれを服従

と取ったのか、杏樹の手首を掴んだまま店を出た。

昨日もこのパターンだったが、どれだけ強引なのだろう。自分の思い通りにならないと不機嫌になるなんて一番嫌いなタイプだ。

「もう、放してっ！」

店の外に出て、やっと我に返った杏樹は椎名の手を乱暴に振り払った。

「ていうか！ 婚約者ってなんなのよ!!」

突然の登場と勢いに気圧<sup>けお</sup>されてしまったが、色々聞き捨てならなかった。

「こんなところで騒ぐな。とりあえず車に乗れ」

椎名はそう言うのと再び杏樹の手首を掴み、パーキングメーターの前に停めてあった車の助手席に押し込んだ。

「乱暴にしないで！ 一人で帰れるから!!」

ジタバタして逃げ出そうとする杏樹を椎名の手がシートに押し戻す。

「どんなに暴れても無駄だ。俺の仕事はおまえを自宅まで送り届けることなんだから諦めろ。それより、一人でシートベルトできないなら俺がやってやろうか？」

突然椎名が覆い被さるように身を乗り出してきて、杏樹はギョッとして動きを止めた。

「な！ ど、どいてよ！ 自分でできるし！」

ドン、と椎名の胸を押し返し慌ててシートベルトに手を伸ばした。

すぐに椎名が運転席から乗り込んできたが、その唇には口角を吊り上げた、杏樹をか  
らかうような笑みが浮かんでいて、してやったりという顔に杏樹は腹が立って仕方がな  
かった。

それにしてもどうして椎名に杏樹のいる場所がわかったのだろう。

帰りの待ち合わせ場所は会社から離れた場所を指定したし、念のため正面玄関を使わ  
ずに社員だけが使うビルの裏口から出たのだ。見張っていたにしては到着が遅いし、ま  
さか杏樹を探していて偶然見つけたとは思えない。

「どうしてここがわかったの？」

杏樹が不機嫌を隠さずそう口にする、椎名はあっさりとんでもないことを口に  
した。

「簡単。GPSでおまえの居場所を検索しただけだ」

「はあ!？」

杏樹は素っ頓狂な声を上げてバッグの中からスマホを取り出した。暴走車に巻き込ま  
れそうだったときに椎名が拾ってくれたピンクのシリコンカバーがついたスマホだ。

「い、いつ? どこに仕掛けたの!？」

「昨日おまえの携帯番号登録したときにちよつとな。かなり長く操作してたのに気付か  
なかったなんて、おまえチョロ過ぎ」

「ひ、人のスマホに勝手にアプリ入れるなんて犯罪でしょ!」

「俺がストーカーならな。恋愛感情などの好意やその他の感情、またそれが満たされな  
いことに対する怨恨感情を充足させる目的がある場合、だ。残念ながら俺にその感情は  
ない」

「不正アクセス禁止法っていうのがあるでしょ!」

杏樹がすかさず言い返すと、椎名は少し目を丸くしてニヤリと笑った。

「おまえ法学部だったっけ? よく知ってるじゃん」

この顔は杏樹が英文学部出身だとわかっていて、からかっているのだ。

「とにかく今すぐ削除して!」

杏樹は苛立ちながら椎名にスマホの画面を向ける。

「今は運転中だからあとでな」

軽くあしらわれた気がしたけれど、運転中なのは確かだ。

本当なら今すぐ、車を路肩に停めてでも削除してほしいところだが仕方がない。杏樹  
は唇をへの字にしてシートに身体を預け、プイッと窓の外に顔を背けた。

杏樹が静かになったのを幸いと思っているのか、椎名は無言でハンドルを操って杏樹  
の存在などないかのように振る舞っている。

わざと無視を決め込んでいるような気もする。ここでさらににか言ったら彼の気を引こうとしているようで、黙っているしかなかった。

スピーカーからは低い音でFM放送が流れていて、流行の洋楽とDJのトークがやけに陽気に聞こえる。椎名は運転のときは音楽ではなくラジオ派らしいなどと、どうしてもいいことを考えているうちに、車は三隅家に到着していた。

「着いたぞ」

「そんなこと言われなくてもわかってます」

椎名の何事もなかったかのような口調に腹が立って、杏樹はぞんざいに言い返す。さつさと車を降りようとシートベルトに手をかけると、椎名がその手を押さえた。

「待て。ちゃんと話をつけておこうぜ」

「……話すことなんてないけど？」

「さっきの男のこと。あれ、誰？」

椎名は左手で杏樹の手を掴んだまま、もう一方の腕でハンドルにもたれかかる。黒々とした二つの瞳の射貫くような眼差しに、杏樹は突然鼓動が速くなるのを感じた。

「……村瀬さんのこと？」

「まだ彼氏って感じじゃなかったけど、あいつ、おまえに気があるんだろ？」

「……」

もしかして村瀬とデートをしていたと思われるのだろうか。確かに村瀬のほんわかとした笑顔に癒やされていたのは否めないが、彼氏にしたいというタイプではない。

「パパには内緒にしてほしいんだけど」

いつまでも村瀬のことを黙っていても転職のことはバレてしまうだろうと考え、杏樹は前置きをしてから口を開いた。

「あの人は転職エージェントなの。実は……転職を考えてて、今日は今後のことを相談するための面談だっただけよ」

「転職、エージェント……？ どうして？」

それが普通の反応だろう。まだ入社して半年だし、親の会社なのだから人生イージーモードだと考える人も少なくないし、事実友達にそう言われたこともある。

しかし実際にはなんの仕事も任せてもらえず、結婚までの繋ぎとして在籍しているだけだと思われる秘書室のお荷物社員だ。

「本当はパパとはなんの関係もない会社に就職するつもりだったんだけど、兄と一緒にって説得されてうちに入社することになったの。でも会社じゃ上司も先輩もすごく気を遣っているのがわかるし、なによりまともに仕事をさせてもらえてないし……それなら親の影響のない会社で社会人としてやり直したいなって」

もちろん外の世界が厳しいこともわかっているが、一人の社会人としてちゃんと働い

てみたい。

「椎名さんはお嬢様が甘えたことを言ってるって思うかもしれないけど、私には大事なことのな」

悪いことをしているわけではないが、コソコソ動いているので後ろめたい。杏樹がそう考えたときだった。

「別に？ いいんじゃない？」

椎名がそんな反応を返してくると思わなかったから意外だ。どちらかというと親の言うことを聞いて余計なことをするとか、ただの反抗期だと片付けられると思っていた。

「あ、ありがとう」

礼を言うのもとんちんかん気がする。でも肯定されたことは素直に嬉しかった。

「と、とにかくそういうわけで目下就職活動中なんだけど、パパは私が外の会社で働くことに反対してるから内緒で会ってるの。それだけよ」

やましいことなど一つもないのに、椎名が勝手に勘違いしただけだ。せっかく村瀬が食事に誘ってくれたのにあんな形で別れてしまっただけは、誤解をしたに決まっている。あとでちゃんと説明しておかないと思った。

「今日はせっかく最近の転職事情を教えてくれるってお食事に誘ってくれたのに、椎名さんが邪魔したんだから、ぜーったいパパには内緒にしてよ」

杏樹は思わず上目遣いで椎名を見つめてしまった。

すると椎名は少し考えるような仕草をして、それから大きな溜息をついた。

「事情はわかった。まああの男と食事に行っても、たいしてメリットがあるとは思えないけどな」

「なによ、その言い方」

意外にも理解があるのだとせっかく見直したところなのに、いちいち余計な一言を付け足す男だ。

「別に。それよりなんで送迎されるのが嫌なんだ？ 送迎なら毎日満員電車で通勤しなくていいし楽だろ。それに彼氏もいないみたいだし？」

最後の言葉には笑いが含まれている。自分が誤解したくせにと、杏樹は椎名の顔を睨みつけた。

「そっちが勝手に村瀬さんを彼氏だって誤解したんでしょ。それに、私に彼氏がいるといまいとあなたに関係ないじゃない」

「それが関係あるんだな、これが」

「は？」

「親父さんから聞いてないのか？ これからしばらくは送迎以外でもおまえが出掛けるときは俺が付いていく契約になってるんだ。四六時中男と一緒にいるとか変な誤解をさ

れても困るから、俺が婚約者のふりをするのはどうかって提案したんだ。親父さんもその方がいいと喜んで受け入れてくれた」

「はあ!？」

さっきはスマホのGPSの件で頭がいっぱいですっかり忘れていたけれど、村瀬に向かって「俺の婚約者」と言い切ったのを思い出した。あのとき彼の中ではすでに婚約者の演技が始まっていたらしい。

というか、こちらの許可もなく勝手に婚約者だと宣言するのはやめてほしい。それ以前に彼に守ってもらうことだって認めていないのだ。

「言っておきますけど、私はたとえお芝居だとしてもあなたみたいな人が婚約者だなんて認めないから! だから送迎は結構です!!」

「俺みたいな男に彼氏役やつてもらえるなんて嬉しいだろ?」

わずかに身を乗り出した椎名に顔を覗き込まれ、ドキリとして動けなくなる。

「……どうした?」

言葉に詰まった杏樹を見てさらに椎名がじっと見つめてくる。なんだか心の中で見透かされそうで少し怖い。

「……」

椎名に見つめられるだけで心臓が早鐘のように音を立て、勝手に頬が熱くなってしま

うなんておかしい。男性と車の中に二人きりで、こんなに近付いて話すのが初めてだからだろうか。

突然椎名を男性として意識してしまい、ただでさえ大きな音を立てている心臓の音が頭の中まで響いてきて、なにも考えられなくなってしまう。

「ち、近いし……!」

なんとかそう呟いて顔を背けたけれど、椎名に赤くなった顔を見られなかっただろう。車内が暗いから案外気付かれないかもしれないと自分に言い聞かせたときだった。

「そういえば、勝手に姿をくましましたお仕置きをしてなかったな」

椎名がさらに身を乗り出し、覆い被さるようにして杏樹を見下ろしてくる。

「は? お仕置きって……い、意味わかんないんですけど!」

とつさに扉に手を伸ばし逃げ出そうとしたけれど、シートベルトに阻まれて動くことができない。

「だから近いってば! 離れて!!」

これではまるでキスをするみたいだ。パニックになった杏樹が思わずギュッと目を瞑ったときだった。

「なに焦ってるんだ? もしかして、俺にキスされるとか誤解しちゃった?」

笑いを含んだ声音にバツと目を見開くと、間近でニヤニヤしながら杏樹を見下ろす椎

名と視線がぶつかった。次の瞬間カッと頭に血が上る。

「し、してません！ ていうかあなたみたいなおじさん、タイプじゃないし！」

「おじさん!? 俺はまだ三十二だ！」

おじさんと呼ばれたのが心外だったのか、椎名がムツとする。

「私と九つも離れてるじゃない！ 私から見たら立派なおじさんだから！」

杏樹はそう言い捨てると、今度こそシートベルトを外して車から飛び出した。

「おいっ！」

すぐに扉が開く音がして椎名が追いかけてくる気配がしたけれど、杏樹は振り返らずに家の中に逃げ込んでしまった。

### 3

翌日。杏樹は椎名に車の中からかわれたことを引きずって、迎えの車の前に横井の姿を見たとたん、ホッとしてしまった。

「オハヨウゴザイマス……」

「昨日は椎名とやり合ったみたいですね」

警護をする上で、昨日の出来事も共有しているのだろう。杏樹は唇をへの字にしながら後部座席に乗り込んだ。

「私、やっぱりあの人のこと好きになれそうにありません」

「ふふふ。椎名はあなたを気に入ってますけどね？」

運転席でシートベルトをしながら横井が小さく笑う。

「気に入ってるってどこがですか？ あんなにイジワルなのに？」

一般的に気に入っている人間に対してあんな口の利き方はしれないと思う。横井は独特な思考回路を持っているんじゃないだろうか。

「キャンキャン吠える子犬みたいで、ちよつとうるさいけど可愛いつて言ってみましたよ」

「横井さん、それ褒めてないですよね？」

「いえいえ、椎名流の可愛らしいって表現だと思いますよ」

やっぱり考え方が少しずれている。杏樹は曖昧に微笑み返すしかなかった。

「今日のご予定ですが、取引先の創立記念パーティーに出席すると伺っていますが、変更はありませんか？」

「そのつもりです」

本来なら取引先の集まりに顔を出すのは父と兄の仕事なのだが、現在ミスミ製菓の専務取締役である兄は、将来の経営者としてMBAプログラム参加のため海外留学中だ。

そのため表向きは兄の代理として参加することになっているが、実際には結婚相手を探すためにパーティーに引っぱり出されるのだろう。こういうことは大学時代から何度かあって、杏樹も仕方なく付き合っている。

このパーティーに出席することは以前から決まっていたが、昨日の椎名の話が本当なら、父はもう結婚相手を探すために杏樹を紹介して回る必要はないはずだ。でも、朝食のときそんなことは口にしていなかった。

だとすると、椎名が言っていた婚約者云々は杏樹をからかうための冗談だったのかもしれない。

「帰りは椎名が迎えにきて、パーティー会場のホテルまでお送りするそうですので」

「……」

やっぱりあの男の言いなりになるのはイヤだ。パーティーには一人で行けるし、なにより昨日あんな別れ方をした椎名と顔を合わせたくないと思うてしまう。

「杏樹さん、ものすごく嫌そうな顔してますね」

「わかりますか？ 横井さんが気を遣ってくれているのにすみません」

「いいえ。対象者に嫌われるような態度や言動をした椎名が悪いんですからお氣になさらず。せいぜい振り回してやってください」

まるで杏樹が昨日のように行方をくまますことを推奨するような言葉に困ってしまう

が、やはり素直に椎名を受け入れると約束できなかった。

というか、横井には悪いが今夜こそ椎名の送迎から上手く逃げるつもりだった。

昨夜自宅でスマホからGPSアプリを削除しようとしたのが見つけられなかったの  
で、昨日のようにあとから追いかけてくる可能性があるが、その前に父と合流をして椎  
名の無能さを訴えようと考えていた。

父だって、二日続けて杏樹に撒かれてしまうボディーガードなど役立たずだと思っ  
たろう。そうすれば堂々と送迎を断ることができるというもののだ。

しかし杏樹のその作戦はあっけなく崩れ去ってしまった。

定時になりロックスカールームでフォーマルなワンピースに着替えてからオフィスを出  
たのだが、エレベーターを降りて昨日のように正面玄関を通らず裏口へ向かうとしたと  
たん、後ろから誰かに手首を掴まれた。

「え……っ」

驚いて振り返ると、そこには唇に勝ち誇った笑みを浮かべた椎名が立っていたのだ。

「ど、どうして……」

「待ち合わせは向こうだろ、杏樹」

ニヤリと歪んだ唇を見て、行動を読まれて先回りされていたことに気付いた。まあ椎  
名もプロだから二度も同じ手にかかるつもりはないのだろう。

「ここは、待ち合わせ場所じゃないけど？」

杏樹はあくまでも待ち合わせに行くつもりだったという顔をした。

「早く着いたからな。それに婚約者の顔を早く見たかったし」

椎名の言葉に、その場で二人の様子を伺っていた社員たちがざわめいた。杏樹はその空気を感じて初めて、自分たちが注目されていたことに気付く。

「ちょ、ちょっと！ こ、こんなところで」

「別に構わないだろ。社長も俺たちの仲を認めてるんだし」

「こ、声大きいっ！」

周りの人たちに聞かせるような台詞に、杏樹は慌てて椎名の腕を引っ張ってビルの外に出た。

去り際に社員たちの間から「超イケメンー」とか「さすが社長令嬢の婚約者」という囁きが聞こえたときは、言い返したくてたまらなかった。

そうなのだ。椎名がもつと不細工だったり、杏樹が苦手な厳つい感じの男性だったらいちいちドキドキしたりしないのに、彼がイケメン過ぎるから困る。

しかも運命の出会いだと思ってしまったほど好みの顔だし、中身がどんなに性格が悪く気が合わないとわかっていても、ついつい反応してしまふ。

「もう！ あんなどころで婚約者だなんて言ったら、会社中に噂が広がっちゃうで

## 立ち読みサンプル はここまで

しょ!!」

「構わないだろ、そういう設定なんだから。むしろ一度で周知できてよかったじゃん」

たとえ婚約者という設定だったとしても、あくまでも設定なのだからわざわざ周知しなくてもいいはずだ。

今日は金曜だから、この週末にSNSで広まって、月曜の朝までには会社中の人を知っているような気がして怖い。元々杏樹の寿退社を期待している秘書課の人たちは大喜びするだろう。

これ以上会社に住づらくなるのかと気が重くなったが、転職さえしてしまえばその噂からも逃れられるのだと前向きに考えるしかなかった。

「さて、そろそろ移動しないとパーティーに遅刻するぞ」

そう言われて初めて椎名の服装がいつもと違うことに気付いた。

「……もしかして、パーティー会場の中にもついてくるつもり？」

「当たり前だろ。おまえの婚約者って設定なんだから、エスコート役がいたら信憑性が高まるし」

あくまでも杏樹をガードするときには誤解を生まないための設定のはずなのに、周知だの信憑性にばかりこだわって、少しずつ目的が変わってきている気がする。

杏樹は改めてスーツ姿の椎名をまじまじと見つめた。